

普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例

－古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に－

市毛秀人・依田亮一

はじめに

今日、神奈川県下で行われている埋蔵文化財発掘調査の多くは、街中での再開発事業等に伴う調査が中心で、日々の調査の運営・進行にとって、原因者（事業者）はもとより、とりわけ近隣住民の理解と協力を得る必要性が以前にも増して大きくなつたと言えるだろう。そこで、時折、趣向を凝らした現地説明会や展示会といった普及啓発事業が各地で開催されているなかで、見学者に理解を促す補助資料として、賛否両論はあるとしても、各種さまざまな遺跡の復原図や模型などが活用されることがある。

私たちは、平成13年度に平塚市真土・四之宮地区に所在する湘南新道関連遺跡の発掘調査に携わり、平成14年2月9日に実施した現地説明会において、第1図に掲げたようなカラーリーフレットを制作する機会に恵まれた。調査地点の周辺地域はここ20数年来、開発に伴う事前の発掘調査が頻繁に行われ、それによって長年所在が掴めなかつた古代相模国の行政的拠点、すなわち相模国府跡の有力な推定地として今日注目されるようになった【注】。そのため、説明会では当日参加された見学者が、限られた時間で国府とは一般的にどのような場所であつて、また相模国府に関するこれまでの調査・研究動向から調査地点周辺が地理的・空間的にど



第1図 湘南新道関連遺跡 現地説明会資料（上段：表面、下段：裏面）※縮尺 原版の1/4

のように位置付けられるのか、という2点について具体的に示すために、古代相模国府の景観想像図を制作することにした（第2図）。さらにリーフレットでは、遺跡上空から撮影した現代の真土・四之宮地区の航空写真と、ほぼ同様な視点から眺望して描いた景観想像図とを対称的に配置することによって、当該地域の景観の変貌も併せて理解出来るような工夫も図ってみることにした。

見学者自身の想像力を掻き立てる目的もあって、景観想像図には敢えて詳細な説明文やキャプションを付さないことにしていたが、今後、説明会や展示会等において同様な絵図面を作成し、活用する機会の参考になればと思い、小稿では絵図面の作成経過や方法、その内容（解題）について、記憶を辿りながら書き留めてみることにした。なお、この景観図は、後に示すようにかなりの部分を仮説に仮説を重ねた、いわばフィクション性の高いもので、「復原図」と呼ぶにはほど遠く「想像図」と付した所以である。また、絵図面の作成に際しては、長年平塚市内の考古学的調査に関わられ、相模国府研究にも造詣の深い平塚市博物館学芸員の明石新氏の全面的なご指導・ご助言を頂いていることも併記しておく。

1. 絵図面作成の前段階

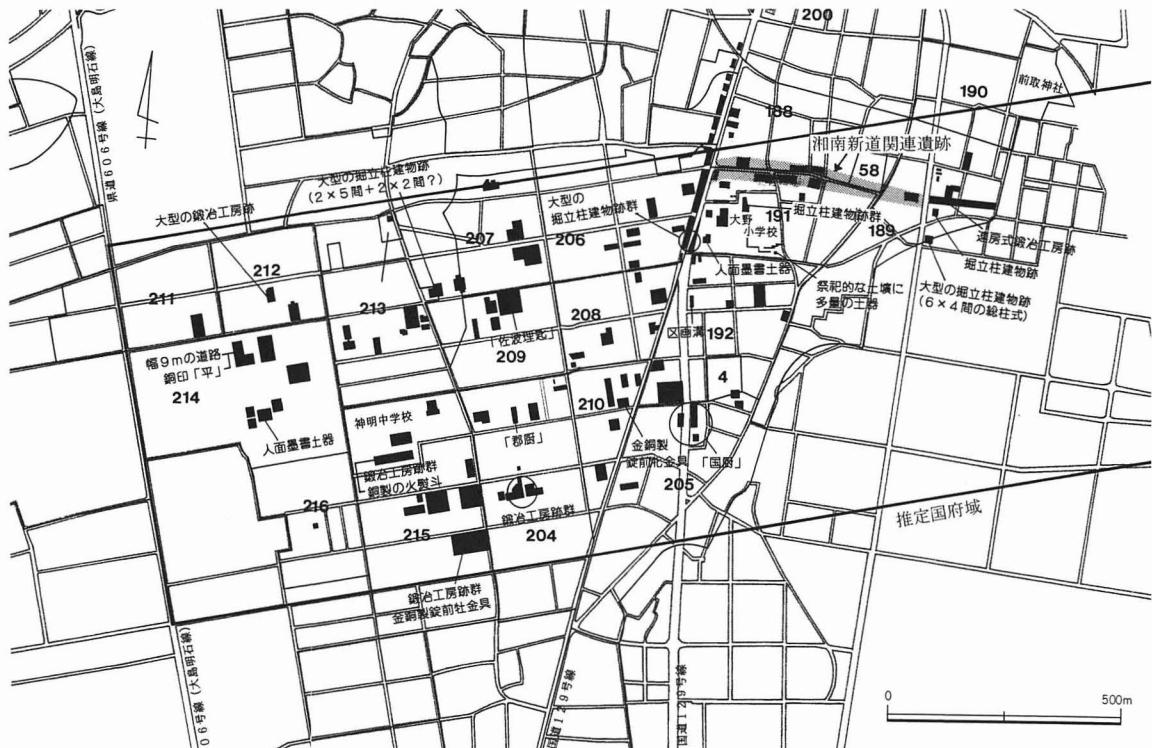
図案の構想者と作画者が異なる場合、作業上の留意点として、構想を正確に伝達し、描画のディテールについて互いの意志疎通をはかることが、何よりも重要であることは言うまでもない。構想者が事前に作画者に対して呈示したものとしては、①図案の構図と視点および視野、②復原図を作成するうえで参考となる先行研究（各種復元模型やイラストなど）、③当該地域の地理的・考古学的情報、の3点である。

①については、湘南新道関連遺跡のこれまでの調査所見として、官衙的な大型の建物は未発見であり、堅穴住居を主体とした遺構が中心に検出されているので、国庁や曹司群が立ち並ぶ、いわば国府の中心街だけを描くのではなく、生産・居住域や交通路を含む諸々の要素全般を示したいという意図から、広い範囲を上空から眺望して描く鳥瞰図的な描画方法が適切と考えた。アングルは当初調査地点を中心に据えることを考慮したが、後に触れるように遺跡の立地と環境、殊に（すべて推定ではあるが）当時の相模川流路、古東海道、四之宮（現前鳥神社）、曹司群といった描画上目にとまる要素との位置関係から、やむを得ず画面の中央よりやや上方にずらす配置をとることにした。

次に②については、これまでに刊行された都城・地方官衙に関する研究書・普及啓蒙書や各地の博物館の展示図録に描かれたイラスト、復原建築物や模型等の写真を集成し、とりわけ発掘調査によって幾らかでも様相が判明している伯耆・近江・三河・下野・武藏の諸国府や多賀城の復原図を、相模国府をイメージするまでの参考にした。しかし、官衙域付近だけを描いた復原図は各地で色々と試行されているものの、その周辺に展開していたであろう生産・居住域までをも含めた復原図となると以外にも少ないと気付く。前例が少ないことも手伝って全体的な構想がまとまらず、ラフスケッチ段階では試行錯誤を重ね、闇雲に時間だけが費やされてしまった。当初よりイメージがある程度固まってさえいれば、約1ヶ月かかった制作上での時間的ロスはかなりの割合で削減出来たように、今にして思う。ちなみに、地方官衙の景観復原図としては、山中敏史・佐藤興二著『古代の役所』（岩波書店、1985年）の下野国府（同書80頁）・白河郡衙（106頁）・志太郡衙（139頁）・伊場遺跡（164頁）の各復原図、また鳥瞰図としての景観描写の方法では、直接国府を対象としたものではないが、小山靖憲編『週刊朝日百科日本の歴史60一家と垣根ー』（朝日新聞社、1987年）での摂津国嶋上郡村落景観図（144頁）、さらに都の中での細かい生活描写としては、坪井清足監修『平城京再現』（新潮社、1985年）の市場（20頁）や宅地（24頁）の復原図などが参考になった。

最後に、相模国府をめぐる近年の調査・研究状況は、基本的に明石氏の研究成果を参考とした。氏の研究によれば、①国庁は未発見、②古代の遺構が密集し、かつ特殊な遺物を出土する市内四之宮地区を中心とした東西2km、南北1kmの範囲が推定国府域として設定可能（第3図の太線内）、③国府域の面積が1,122,000m²に対して1998年度現在までの発掘調査実施面積は27,661m²で、全体の約2.5%程度、④国府域内で発見された竪穴住居は898軒を数え、半世紀単位で時期的な動向を見ると9世紀後半段階の175軒が最も多い、⑤竪穴住居の耐久年数を15～25年を想定した場合、9世紀後半に国府域全域で存在していた住居数は2,100～3,500軒、⑥一つの竪穴住居の居住人数を3人と仮定した場合、国府域内の総人口は約6,300～10,500人程度、などのデータが得られている。さらに、⑦調査地点周辺での特記すべき調査所見として、6×4間の縦柱建物跡（坪ノ内遺跡第5地点）、連房式鍛冶工房跡（同第6地点）、多数の掘立柱建物（六ノ域遺跡第3地点）、大型掘立柱建物（四之宮下郷3区）、「厨」銘の墨書き土器（稻荷前A遺跡）、礎石建物（高林寺遺跡第5地点）、幅9mの道路状遺構（構之内遺跡）などが挙げられる。

このうち、高林寺遺跡第5地点の礎石建物は従来寺院跡として評価されてきたが、近年の研究では遺物の様相や建物構造の検討から国司館の可能性が指摘されている。また、構之内遺跡の道路状遺構は規模的にみて古代の幹道（古東海道）に比定されていて、その延長をたどると湘南新道関連遺跡の南方を東西に走行するようである。これらの点から、未発見の国庁が高林寺遺跡付近に近接し、その周囲にはそう距離を隔てることなく堅穴住居を主体とする居住域が密集して広がっていた景観を想定してみた。さらに、四之宮（現前鳥神社）、相模国分寺、一之宮（現寒川神社）など、平安時代の文献史料に現れる社寺を景観要素に加えた他は、東海道からは北へ分岐する伝路や方画地割、主要幹線道路沿いには馬家や市場・曹司群を建ち並べ、土器・木工・鍛冶・布等の各種手工業生産にかかる施設、寺院跡、墓地、さらには宅地間の小路など根拠の乏しい憶測を重ねていった。また、相模川左岸の自然堤防上を走る通称八王子往環（旧国道129号線）なども、かなり



第3図 推定国府域における既往の調査地点と成果（平塚市博物館1998に一部改変）

古くに遡ると仮定して描き、その上、生活感を示すためにカマドの煙を立たせたり、あるいは全ての建物が整然と建ち並んでいる景観は不自然と考え、建築中の建物、廃絶して屋根が朽ち果てた建物や、豊穴が窪地化した様子なども表現してみた。水陸交通の要に位置することの多い国府にあっては、相模川の渡河点付近に舟着場や資材を積卸する場も広がっていたであろう。

以上のように、考古学的研究成果に想像を加えた情報を提示し、作画者に作画を依頼した。

2. 景観想像図の制作過程

景観想像図の制作過程

今回景観想像図を描くにあたっては、透視画法と呼ばれる画法を採用した。よく新聞の折り込み広告などに入ってくる、いわゆる建築パースといわれるものである。透視画法は、今では普通CAD等のコンピューターで制作されることが多いのだが、企画の話が持ち上がってから入稿まで約1ヶ月という時間的、また費用的な余裕が無かった関係で、今回はベースになるグリッドラインと、大まかな建物の外形のみを透視画法を使って簡易的に描くことにした。「簡易的」とした理由には、実際は正確に計測すべき部分を、定規などは使用せずにフリーハンドで、殆ど目測によって必要最低限を描いたからである。したがって、かなり正確さを欠いている部分があり、透視画法を採用したというよりも、参考にしたという程度の精度になっている。ただ、地形をほぼフラットであると仮定したのと、個々の建物が結果的に小さくなってしまった点などが、絵の歪みを若干軽減させることになった。ごく限られた時間の中では透視画の正確さよりも、むしろ国府にどのような施設や建物が立ち並んでいたかを示す事が重要と考えた次第である。また、北西（画面左上）に描いた真土大塚山古墳や、さらに遠方にある大山、北東方向（画面右上）に描いた国分寺などは、実際画面の中には入ってこない景観要素であって、道を歩いている人々の姿なども、実際のスケールはもう少し小さく描くべきものである。しかし、遺跡が立地する地理的な環境を示すうえでは格好のメルクマールになる要素は敢えて視角に含めることとしたり、さらには生活の雰囲気をより豊かに表現するなど、大幅にデフォルメを加えて描いた部分もある。

製作過程は、大きく3段階に分けられる。1つ目は約100m四方のグリッドラインの透視図を描く作業。これはベースとなる部分で、どこからどのように見るかによって絵の内容も大きく変わってしまう。2つ目はグリッド内の個別の建物を描く作業である。これは数は膨大だが、1つ目ほど精密な透視画法は必要なく、比較的単純な作業であった。しかし、個々の建物と、その周辺を含めた配置については、多少手間がかかる。3つ目は彩色である。

約100m四方のグリッドの透視図を描く

まず、古東海道の想定ラインを東西軸に据え、100mグリッドと推定国府域を落とす（第4図）。次に、ポイントを決める（第5図①）

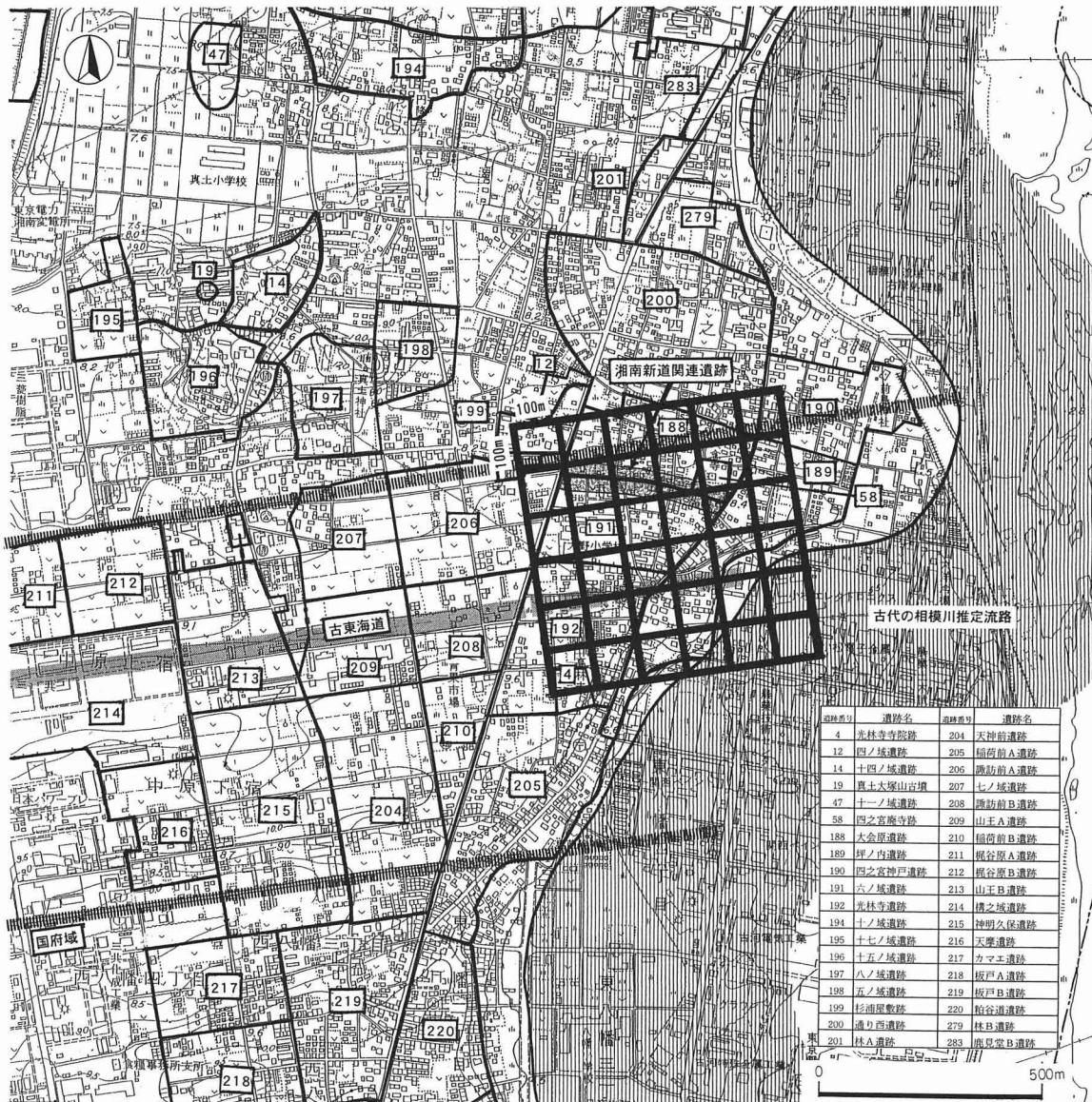
これは、最終的に透視図のほぼ中央にくる場所になる。一番の見せ場にポイントを置くのが理想的であり、今回も調査地点を中央に配したかったのだが、画面に入れたい他の要素が周辺に散在していたために、構図、画角、視点の距離、実画面（A3版サイズ）との関係上理想は叶わなかった。

視点の水平位置を決める（第5図②）

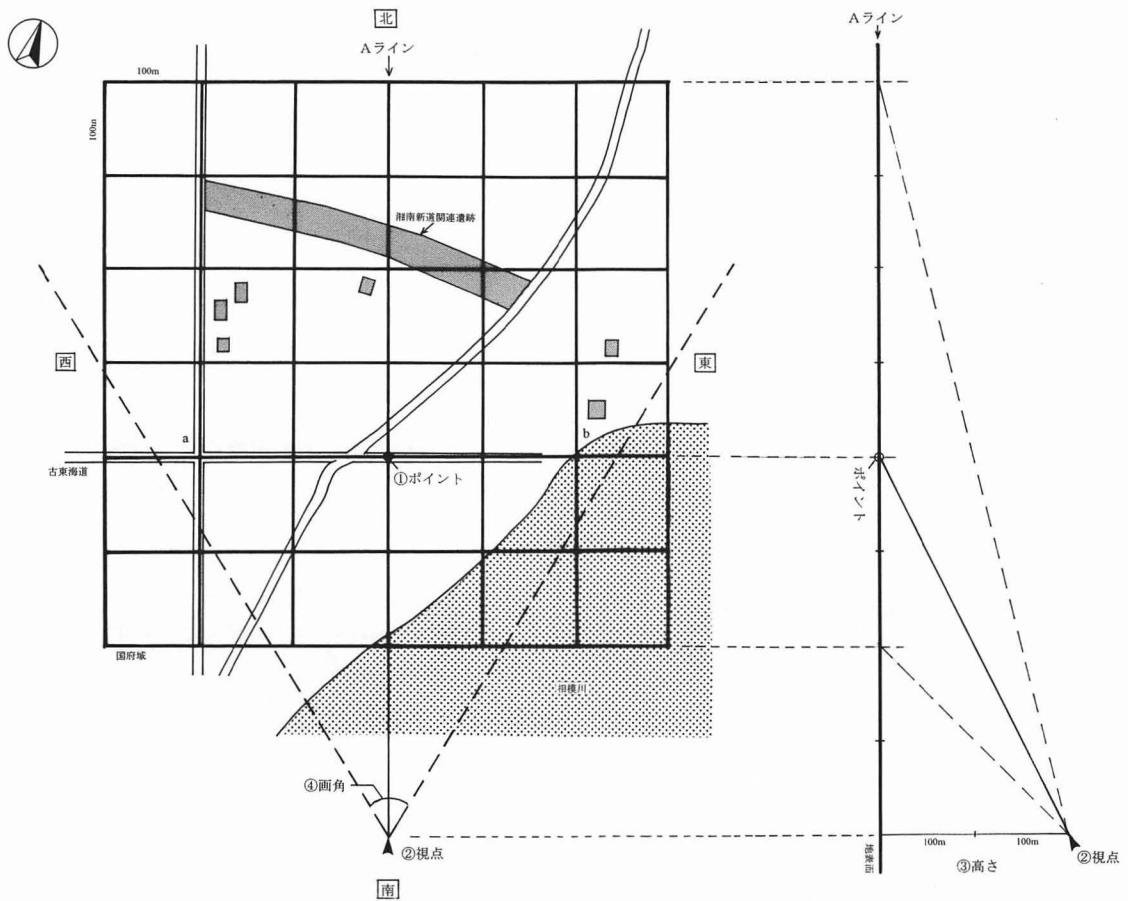
今回はポイントからグリッドの軸線上約400m南方に設定した。どの方向からどのくらい離れて①のポイントを見るかということである。特にどの方向からというのは重要である。当初は東方から相模川や前鳥神社を手前にして富士山、大山をバックに構図を考えていたのだが、北東方向にある海老名の国分寺を画面に入れようとしたため、南からのアングルで描くことにした。後で水彩で色をのせるときに思ったのだが、影の落ち方等を考えると南からのアングルで正解だったように思う。

視点の地上からの高さを決める（第5図③）

これは頭の中でなかなか想像しにくいので、決定は難しい。あまり高い位置から下を見下ろすと、特に現代のように高い建物や構造物がない（と仮定した）場合、高さの関係が表現しにくく立体感がわきにくい。したがって、出来れば目線の高さがベストであるが、低すぎると今度は前にある建物や木で背後が隠れてしまい全体を見渡すという目的を果たさなくなってしまうので、少なくとも屋根勾配よりは角度が急な方が良いと思われる。そこで、今回は地上から約200mの位置に設定することにした。ポイントまでの距離が約40



第4図 推定相模国府域と100mグリッド（作図の中心的範囲）及び周辺の遺跡



第5図 視点の位置と100mグリッドとの関係（概念図）

0mなので、およそ3階建てのマンションの屋上から30m先を見下ろすような角度である。そして視点とポイントが乗る線をAラインとする。

画角を決める（第5図④）

35mm判カメラでレンズを約35mmの画角に設定した。手前のものと後ろのものの大きさの差をあまり付けたくないないので、出来れば標準から望遠系レンズが良いのだが、これだけの広範囲をカバーするとなると、相当視点を引かなくてはならない。そうすると今度は1つ1つの要素が小さくなってしまい、実際描くのは困難である。35mm位のレンズであれば、ある程度の範囲はカバーできるし、平面的な広がりも表現できる。個人差はあるだろうが、わりと人間の目に近いのではないだろうか。東の前鳥神社と国分寺、西の古東海道と南北に直交する伝路との交差点はぎりぎりカバーできた。因みに、aからbまでの長さ：ポイントから視点までの距離 = 1 : 1 のとき、ほぼ標準レンズ（43mm位）となる。

以上、①～④と番号をつけて説明したが、順番はない。優先するところから決めていけば良いのだが、どちらかを決めるとどちらかに無理が生じてくる。うまく調整しながら相互的に決めていくしかなく、個別の建物を書き始めてからでは修正できないので慎重に決めなければいけない。今回は画角から始めたのだが、なかなかうまくいかず、よって何枚もラフスケッチを描き、時間も随分とかかってしまった。

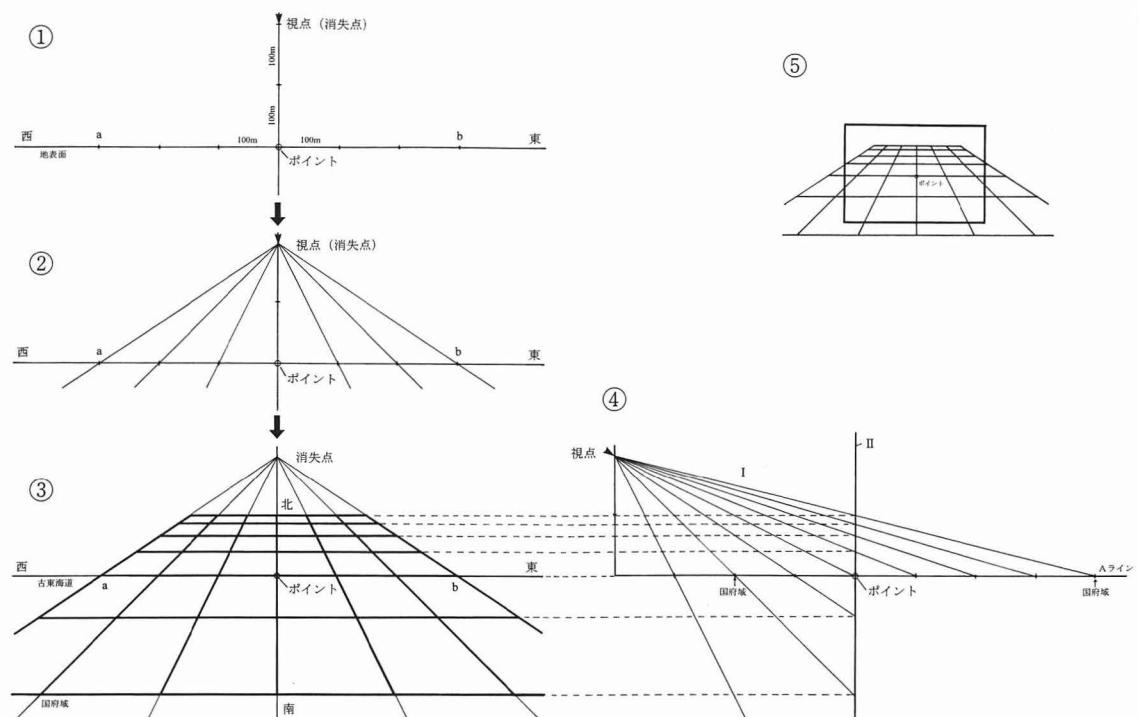
第5図を南から見たのが第6図①で、横線は古東海道ラインである。そして、ポイントの真上200mに視

点をおく。この点が消失点となる。次に、旧東海道ライン上のグリッド各交点と消失点を結ぶ（第6図②）。これは、南北方向の各グリッドラインになる。そのとなりに先ほどの第5図③を描く（第6図④）。そして、視点とAライン上のグリッド各交点を結ぶ（I）。次に、ポイントから上下に線を延ばす（II）。IとIIの各交点の地表面からの高さで平行にのばせば、東西方向の各グリッドラインがひける（第6図③）。これでグリッドの透視図は完成した。あとはポイントを中心に、任意にトリミングをして、拡大して下図とした（第6図⑤）。

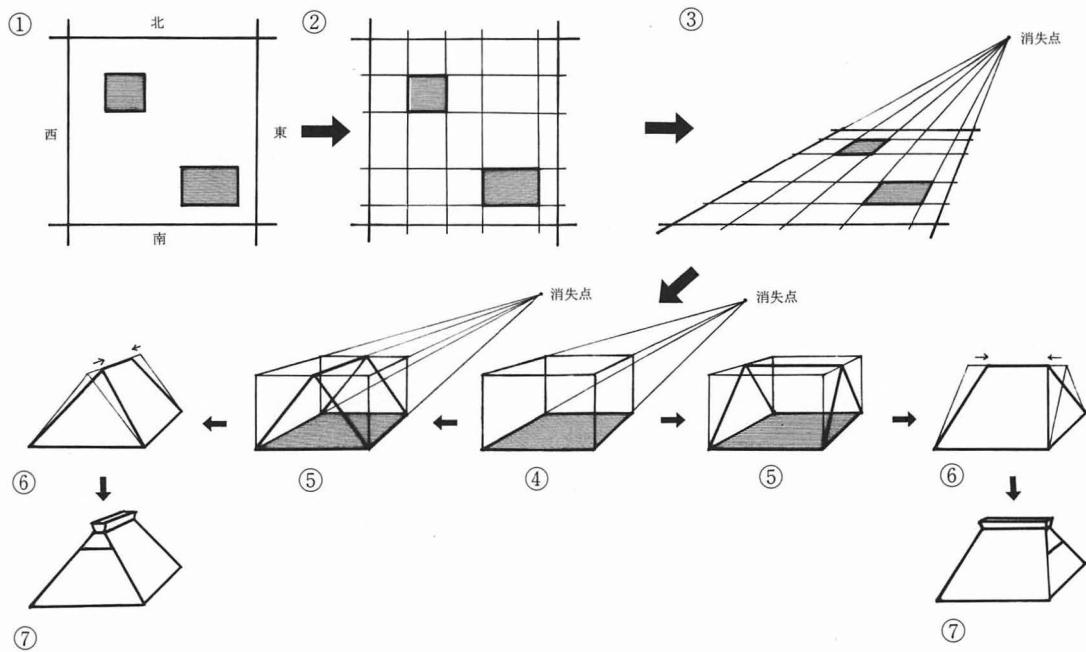
個別の建物を描く

基本的に、建物構成を堅穴住居と掘立柱建物の2種類を中心に据えたが、明石氏の研究で堅穴住居：掘立柱建物=5:1という所見から、必然的に堅穴住居を数多く描くことにした。また、一個一個の建物が小さいとかなりの数のため、簡略化して描かざるを得ず、さらに実際は様々な形の建物があったであろうが、個々の違いを表現することはしなかった。それよりも出来る限りたくさん描いて、国府に住居が密集する様子を表現する方を優先した。ここでは、最も量を多く描いた堅穴住居について説明する。

第7図①のような住居の配置があったとして、住居に触る線をグリッドラインと平行に引く（第7図②）。次に、その線を目見当で透視図内に入れて、大まかな場所を設定する。このとき東西方向の線は必ずグリッドの東西ラインと平行になるように、また南北方向の線は必ず消失点を通るようにする（第7図③）。これが、住居の平面図の透視図となる。今度は高さを立ち上げる。目見当で棟の高さで平面を立ち上げて直方体を作るのだが、このときも第7図③と同じように、東西方向の線はグリッドの東西ラインと平行に、南北方向の線は消失点を通るようにする（第7図④）。次は直方体の上面を2分する線を引き、棟のラインとする。その線の両端から下面の隅に線を下ろす（第7図⑤）。次に棟の両端を少し中央に寄せて、そこからまた下



第6図 100mグリッド透視図作成のための手順



第7図 竪穴住居下図作成のための手順

面の隅に線を下ろす（第7図⑥）。そしてあとは少し細工をすればおおよその外形ができる（第7図⑦）。

着色方法

最後に色についてであるが、まず鉛筆でA3サイズの画用紙に下書きをした上で、水彩絵の具を用いて着色を施している。地面や建物を表現するうえでは、人工的色彩を極力排除しようと茶色をベースに据えることにしたのだが、図面中には同色系の要素が多いために、微妙な違いを表現した点については苦労した。また、全体的には統一した色調になるよう努力したつもりである。季節は5月頃を想定して、植物には新緑の緑、水には澄んだ水色をのせた。

おわりに

実証性を欠いた作業故、学術的価値は推して知るべしであり、さらにこの絵図面によって誤解を与えかねないことも充分予測される。とはいえ、見学者にとってイメージしづらいものを分かり易く示すという意味においては、このような想像図の制作も全く無意味ではないだろう。考古学的調査・研究にどれだけ寄与出来るかは計り知れないが、この想像図を叩き台として、今後相模国府のイメージが細部あるいは大枠で書き換えられていくことを切に願うばかりである。最後になりましたが、執筆を薦めて下さり種々ご教示を得ました上田 薫 資料活用課長、湘南新道関連遺跡の調査でご指導を頂いている市川正史 調査第三課長、柏木善治さん、加藤久美さんには感謝申し上げます。なお、小稿は二人の協議によるものだが、2.及び景観想像図の執筆・作成を市毛が、その他を依田が担当している。

【注】詳細は、平塚市博物館1998『夏期特別展 相模国府とその世界』を参照。その他関連する文献は、紙幅の関係で割愛させて頂いた。